

柳田国男の地域経済政策論

新潟大学大学院現代社会文化研究科長

藤 井 隆 至

Plans for Regional Economic Development of YANAGITA Kunio

Dean and Professor at the Graduate School of Modern Society
and Culture NIIGATA UNIVERSITY

Takashi FUJII

(拍手)

新潟大学大学院現代社会文化研究科で研究科長をやっております藤井隆至でございます。高崎経済大学の地域政策学会からこのような光栄な機会を与えていただきまして、大変よろこんでおります。みなさまの前で日頃の研究成果をお話できるのは非常にうれしいことです。地域政策学会には大変感謝をしております。

ここではレジュメに沿ってお話をさせていただきますが、本論に入るまえに、簡単に自己紹介をさせていただきます。

わたしは大学院生のときから柳田国男の研究を本格的にはじめました。柳田国男は民俗学者であるという評価があまりにも定着しておりまして、みなさまのなかには、きょうのテーマであります「地域経済政策」とどう結びつくのかわからないという疑問をお持ちの方が多くいらっしゃると思います。このご疑問と関連づけて自己紹介させていただきます。

ご紹介にもございましたが、私は経済学部の出身でして、経済学の大学院で柳田国男をやりました。私は1967年に東京大学に入りましたが、わたしの学生時代とくに教養時代は学園紛争の時

期にあたっております。わたしたちは政治的におおきく高揚しましたが、それだけに、わたしが大学院に進学した1971年ころは、学園紛争後の制度改革の真っ只中にありました。たとえば、当時は指導教官制が廃止になっていました。つまり、学生を指導する義務をおう先生は制度としては存在しないのです。また、自主ゼミにも単位が出されていました。自主ゼミというのは院生だけの勉強会ですが、正式の授業として認められていたのです。こうした改革の狙いは、個々の院生が自分で先生を探せばよい、というものでありました。

ですから大学院には、よく言えば自由な、悪く言えばアナキーな、そういう空気がございました。けど、わたしのように、経済学の大学院で柳田国男を研究したいという人はさすがにいませんでした。先生方もびっくりしたみたいであります。今であればそういう研究テーマは大学側から認められないかも知れません。指導できる先生がいませんから。しかし私の大学院時代はアナキーでありましたから、「やりたけりゃ、どうぞお好きに」という風潮でありました。わたしはわたしで、他大学にも先生をもとめていきました。おかげでわたしは、経済学はもちろんのこと、民俗学や文学、教育学などの何人かのすぐれた先生方に出会うことができました。経済学では甲南大学の杉原四郎先生、教育学では東大教育学部の大田堯先生、民俗学では宮田登先生、当時は東京教育大学のち東京学芸大学でした。文学では法政大学の外間守善先生がいます。すぐれた先生方から指導を受けることができ、恵まれた院生時代だったと評価しています。

学園紛争の高まりは、日本の高度成長の破綻と無関係ではありません。わたしの大学院時代は、高度成長が破綻し、日本がすすむべき将来の進路について、あらたな選択肢を模索していた時期に当たっています。

わたしは1949年の生まれですから、小学校から高校までの時代は、日本の高度成長期に相当しています。わたしたちの世代の者にとっては、アメリカの豊かさはお手本でありました。日本もアメリカみたいな国になりたいと誰もが願い、明日に希望をもったのであります。経済的に豊かになること、それが日本の目標でありました。

しかし高度成長の末期になると、アメリカでも日本でも行き詰まりが顕著になりました。アメリカは泥沼のヴェトナム戦争から抜け出せず、死を覚悟した若者たちはドラッグに逃避するようになっていました。日本では公害問題が全国で深刻化し、日本人全員が公害病で死ぬのではないかという気にすらなっていました。工業化は都市を発展させ、農村は過疎化しました。学園紛争は、日本の教育システムに対する抗議でありましたが、それだけではなく、ヴェトナム戦争への抗議でもあり、公害を引き起こした日本の近代化そのものに対する抗議でもありました。あのころは、経済的な豊かさよりも、精神的な豊かさのほうが求められていました。アメリカばかり見るという考え方から方向転換し、非アメリカ社会、わたしのばあいであれば日本の社会をもう一回見直そう、日本の経済学をもう一回見直そうというふうに、流れが変わってまいりました。

先ほどのご紹介にもありましたとおり、高崎経済大学の山崎益吉先生はわたしの昔からの友人であります。わたしたちはほぼ同じ年齢でありまして、やはり同じように、日本の経済システムや経

済学を評価しなおよすという時代の空気の中で勉強してまいりました。山崎先生は江戸時代の難しい文章をお読みでございますけれども、私はとても歯が立ちませんので、明治以降の現代日本語に近いテキストしか読みませんでした。それが柳田国男だったのです。ですから、なぜ柳田国男かという、高度成長への反省や批判というものがベースになっているのであります。しかも、山崎先生もわたしも、地域主義の思想を是とする点で共通しています。高度成長の時代は、地域を捨てて大都市へ出て行くのがプラスの価値をもっていました。わたしたちはそれを転倒させ、地域にこだわることにプラスの価値を与えようとしてまいりました。わたしは柳田国男を、地域主義の観点から読んでいます。

自己紹介は以上にして、本論に入らせていただきます。私の柳田理解は世間一般の理解と大分異なっております。しばらくの間は、私の理解する柳田国男にお付き合いをお願いします。

まず、柳田国男はどういう人かという紹介からはじめます。柳田国男の「略年譜」をご覧ください。これをおつくりになった福田アジオさんは、わたしの先生でもあり友人でもあります。福田先生は民俗学者ですので、民俗学の観点で柳田の生涯と学問を整理されています。

彼が生まれたのは、1875（明治8）年です。明治維新が一段落ついて、地租改正が実施されている時期にあたります。地租改正というのは、政府の収入源を年貢から地租に切り替える税制改革で、これを成功させたことにより、明治政府が財政面で自前の安定した経済基盤を持つことができました。この税制改革をふまえて、殖産興業政策などが続きます。言い換えれば、彼の生年は、日本の近代化が本格的に始まった時期といってもよいと思います。

没年ですが、1962（昭和37）年に88歳で亡くなっています。1962年というのは、日本の経済史でいえば、高度成長の開始期にあたります。1955（昭和30）年を高度成長が始まる年と考えますと、高度成長が始まって10年くらいしてから亡くなっています。

柳田国男自身は、高度成長の結末というものを知りません。彼の人生は、日本が欧米に追いつくために工業化を進めていた時期に対応しています。そして、第二次大戦という大きな失敗もふくめ、日本は工業化に成功し、世界有数の経済大国となりました。ですから柳田国男という人は、日本が近代化・工業化に向けて一直線にすすんでいた時代に活躍した人ということになります。ただ柳田国男にとりましては、その近代化の成功は括弧つきの「成功」でしかありませんでした。わたしたちが公害問題や過疎問題という大きな犠牲をはらって理解した工業化の問題点を、彼は日本が工業化する過程でいち早くキャッチしていました。

そのお話をするのがきょうのテーマなのですが、そのまえに、彼の思想を理解するうえでもう一つの重要な点として、どこで生まれたのかということにも少し触れておきます。

彼が生まれたのは、兵庫県神東郡辻川村というところでした。いまは福崎町になっています。江戸時代の辻川村は、姫路藩に属していました。姫路城で有名な藩です。小さな藩ではありますが、藩主の酒井家は幕末には大老や老中を出した名門であります。維新のときにはもちろん幕府側でありました。大学を卒業した柳田は官界に身を置きますが、官界は薩長の出身者が主流でありましたか

ら、徳川方の出身である柳田にとっては、居心地があまりよくなかったのではないかと考えています。いやおうなしに、主流派から距離をおいたところで政府の政策を観察していたのではないのでしょうか。また貴族院書記官長の職にあったとき、貴族院議長だった‘16代様’徳川家達とも対立し、辞職に追い込まれています。家達にとっては、旧姫路藩出身の柳田は身内の子分のようなものだったかもしれません。しかし柳田はそうした主従関係的な人間関係はきらいでありました。柳田が日本の近代化過程を批判的に観察できたのは、そうしたアウトサイダー的な位置にあったからだろうと私は考えています。

父親の職業も重要です。彼のおとうさんはお医者さんでありました。医師としての収入は少なかつたらしく、学校の臨時的な先生をやったりもしていました。生家は在村の知識人だったのです。ですから農村育ちではありますが、柳田自身に農業の経験はありません。村の子としても、彼はアウトサイダーでした。農民をあたたく、かつ批判的に観察しているのも、そうした位置が関係しています。なお、柳田というのは彼の養子先の姓で、生家の姓は松岡でした。福崎町には松岡姓の人が大勢います。わたしのこのお話では、柳田に統一します。

そのほか、1893（明治26）年に第一高等中学校に入学しています。今の東京大学教養学部ですが、一高に入るということは、ひとつの人生を選んだということを意味しています。人生の大きな方向性として、官僚になりたい、日本の指導者になりたいという進路を希望していたと考えてよろしいと思います。

一高で彼はイギリス法の勉強をしております。なぜ一高か、なぜイギリス法かということ、当時の日本は大きな外交問題を抱えておりました。条約改正問題であります。日本は江戸時代の終わりにヨーロッパの列強と条約を結びましたが、その内容は、日本側に不利な不平等条約でありました。日本側としては、近代化を進めるためにも、この条約を対等のものに変えたいという希望を強くもっておりまして。そこで歴代の外務大臣はイギリスなどの列強と条約改正交渉を行うのでありますが、日本の希望どおりには進展しません。

条約の内容が日本に不利であることから、ヨーロッパやアメリカとの貿易条件は日本に不利となり、経済発展にも支障がでておりました。日本の国内では日本の将来につよい危機感を抱く人が多くいたのです。条約改正を成功させるためには日本も欧米並みの強国にならなくてはならないという認識が一般化していました。じじつ条約改正交渉が終わったのは、日露戦争のあとでした。ロシア帝国に勝利したことが直接のきっかけになって、条約を改正できたのです。

柳田の学生時代は、条約改正交渉が不調であった時期にあたっております。欧米列強に対する不満、日本を強国にするべきだという使命感、そういった点で、ナショナリズムの風潮が非常に強い時代でありました。そうしたナショナリズムの時代に、個性が形成される二十歳前後を過ごしたということは、柳田の思想を理解するうえで重要であるとわたしは考えています。

ナショナリズムについて若干補足します。当時の日本国内では、大別して、二種類のナショナリズムがせめぎあっていました。ひとつは国家主導の工業化路線であります。国家の資本を投入して

推進された殖産興業政策はその代表例であります。先行研究は、国家主義的ナショナリズムと整理しています。もうひとつのナショナリズムは、国民主義的ナショナリズムと整理されています。国民主導の近代化、具体的には農業や零細な商工業が近代化をすすめていく形でのナショナリズムです。国民主義的ナショナリズムでは、地方経済の発展が志向されます。柳田は、この国民主義的ナショナリズムの系譜に属します。農村出身の柳田は、生涯、地方の発展につよい関心を示してきました。

そのほかで重要な事項に、1897（明治30）年の東京帝国大学法科大学政治科入学と1900（明治33）年の農商務省農務局農政課勤務があります。数え年でありますが、彼は23歳で大学に入学し、26歳で就職しました。就職するとともに、早稲田大学などで農政学の講義をやったりもしています。

東京帝国大学法科大学はいまの東京大学法学部ですが、ここでは政治科に籍をおいていました。つまり政治学を中心にして勉強をしています。その政治学の一分野に経済学がありました。当時の東京帝国大学には経済学部はまだありません。経済学は政治学の一部という位置付けしか与えられていませんでした。ですから彼は東京帝国大学で法学を勉強し、政治学を勉強し、そして経済学を勉強するというをやったのです。そして勉強の一番の中心は経済学でありました。社会政策学派の経済学でした。

社会政策学派の経済学を勉強したあと、農商務省農務局に勤めます。今で言えば農林水産省でありますけれども、ここに勤めるのは、当時の帝大卒業生としては非常に珍しい進路選択でありました。柳田国男は農政関係のキャリア官僚の第一期生となっています。つまりそれ以前の人たちは、ここには就職していなかったのです。

なぜかといいますと、日本の基本的な方針は工業化を進めることにありました。エリートの卵が農業関係の勉強をすることは極めて稀だったのです。ここにはすでに主流派に入らないという進路選択を見ることができます。主流派に入らないのはかなり自覚的で、もちろん強い理由があつたことであります。

近代化政策は経済社会の構造変化を促進する政策ですから、構造変化にともなう‘痛み’を引き受けなければならない人たちも多数存在します。‘痛み’の取り扱いをめぐって、社会の指導者たち、たとえば政治家や官僚、言論人といった人たちは、おおきく二種類に分かれました。ひとつの種類は、‘痛み’を必要悪とわりきり、痛みを乗り越えて政策を遂行するべきだと考えるタイプです。他方、‘痛み’を発生させないような内容の近代化政策でなければならないという種類の人もいました。柳田は後者の人です。

‘痛み’の発生を未然に防ぐ近代化政策を実施するべきだと考える後者の種類であっても、大多数の人は労働者に関心を向けておりました。工業化の過程で‘痛み’をいちばん強く引き受けることになる人たちは労働者であるという位置づけのもとで、労働者の生活を改善しないと日本の近代化は成功しないのではないかという危機感を抱いていたのです。具体的には、労働者を貧しいまま

に放置しておくとも労働運動が盛んになって日本が社会主義化するのではないかという危機感です。

当時の最先端の経済学は社会政策学派の経済学でありましたが、どちらかと言えば労働問題を研究する人が圧倒的多数を占めていました。柳田はそのような多数派にも組みませんでした。彼は労働者よりももっと困っている人が存在する、それは小作農であると考えました。都会の労働者よりも田舎の小作農のほうが貧しいということは、横山源之助も1899年の『日本の下層社会』のなかで書いています。小作農の生活を少しでも良くする、そういう政策をやっていかなければならないと考え、農業問題・農民問題の勉強をやるという進路を選択し、そして就職先として農業関係の役所に勤めることにしたのです。

整理しますと、一高に入るときには役人になるという進路選択をしております。ただその時には、できれば外務省のほうに行きたいという希望をもっていました。しかし途中で考えが変わりまして、農業や農民関係の仕事をやりたいというふうに変化して農商務省に就職することにしたのです。農商務省を去ったあとも、農業と農民にこだわり続けます。こうして彼の一生の方向性が決まっていくことになりました。

たとえば、どのような政策をとれば小作農の生活をよくすることができるのでしょうか。その一例を紹介しましょう。「略年譜」の1907（明治40）年の項に「小作料米納の慣習を批判す」という柳田国男の論文が紹介されています。小作料というのは地代です。小作農は地主から農地を借りて農業をやっています。農地を借りていますので、地代を払わなければいけません。その地代のことを小作料とも呼ぶのです。皆さん方のアパート代と同じようなものです。アパート代を払うと、その分、自分が自由に使えるお金は少なくなります。小作農が貧しいのは、小作料が高いことが大きな原因になっています。

そこで柳田は、小作料の負担をできるだけ小さくするべきだと考えました。そのことをテーマにしたのがこの論文です。「小作料米納の慣習を批判す」という論文名からも窺えますように、当時は、小作料をコメという現物で納付する慣習が一般的に広くありました。それはよくないと批判したのがこの論文です。

なぜよくないのか。柳田が論文を書いたころには、コメの価格は高くなる傾向にありました。論点を単純化して説明しますと、工業化すれば工場労働者が増え、コメを食べる人たちが増えます。生産量はあまり変化しませんから、コメ不足になります。その結果としてコメの価格が高くなっていく、ということです。だからコメを売る立場になった方が有利になります。地主は小作農からコメを現物で受け取り、コメを販売します。ですからコメの値段が高くなっていくと、高くなった分の利益は地主のところに入ることになるのです。言い換えれば、小作農は、コメの価格が上昇傾向にあるにもかかわらず、現物で納めているので、その利益を手にとることができないのです。

それに対して、小作農が自分でコメを売り、現金で小作料を地主に払うというように制度を変更すれば、小作料は固定的ですから、コメの価格が高くなることにともなう利益は小作農の手に入るはずで、整理しますと、「小作料米納の慣習を批判す」という論文は、小作農の利益を図る政策

を実施し、社会のしくみを変えるべきだという政策案を提案した論文ということになります。

これは一例ですが、そのほかにも小作農の収入を増やす提案をいろいろおこなっています。

この論文を発表した翌 1908（明治 41）年に、彼は九州旅行をいたします。「椎葉村訪問」とありまして、このころから郷土研究に目を向けていくのはご存知のとおりです。あと『遠野物語』が 1910（明治 43）年に出ています。1900 年代の柳田国男は農業政策を専門にやり、1910 年頃から郷土研究に入っていき、というように整理できます。きょうは柳田国男の農業政策を中心に、とくに地域経済政策についての考え方に焦点をしばってお話をさせていただきます。

ここから「柳田国男の地域経済政策論」という本日の講演のテーマに入ります。柳田がどのような地域経済政策を提案していたかを簡単にご紹介するのが今日のわたしの仕事です。

わたしの柳田理解の特徴は、近代化の思想家として柳田国男を読むという点にあります。近代化というだけでは意味は広いのでもう少し限定しますと、日本という国の国民経済をどのようにして作っていくべきか、を考え抜いた思想家として理解しようと思います。条約改正問題については少しお話ししましたが、彼にとって、日本を欧米なみの強国にすることは必要なことでありました。当時の国際政治は帝国主義の時代でありましたから、強国でなければ植民地にされる恐れは多分にありました。少なくとも、不平等条約は改正できません。日本経済がどのような内部構造をもてば強い経済力をもつことができ、かつ貧しい農民たちを少しでも経済的に向上させられると彼は考えたのか、それに着目して柳田を読んでいます。

きょうの講演の結論を前もってお話しておいたほうが、話の内容がわかりやすくなるかも知れません。日本の近代化の内部批判者、日本が歩むべきもう一つの近代化の可能性を提起した思想家、自立した地域経済によって構成される国民経済を構想した思想家だったという評価が、わたしの今日のお話の結論であります。日本経済を強固にする内部構造は、自立した地域経済によって可能になる、というのが柳田国男の思想の核心でありました。いいかえれば、彼は、日本の国民経済は地域経済が自立していない、と診断していたのです。一極集中的な内部構造をもつ眼前の国民経済に対して、地域自立的な内部構造をもつ国民経済を対置したのです。それが「日本が歩むべきもう一つの近代化」であります。この結論を念頭におきながら、いまからの話を聞いてください。

日本政府が強力に推進していた近代化路線は、工業化とくに重工業化でありました。欧米列強の経済力の源泉は重工業にあるとの判断から、日本でもできるだけ速やかに重工業を育てていこうとしたのです。これを育成するには、巨額の資本金が必要になります。日本製の商品が国際貿易に打ち勝つには、労働者の賃金が低いことも必要です。低賃金を実現するには、食料とくにコメの価格が低いことが要請されます。

弱肉強食の帝国主義の時代にあって、日本が列強に互して生き抜くためには、どのような方向性をもつ国民経済が必要なのでしょう。柳田国男が考えたのは、一番貧しい人たちが豊かであるような経済構造をもつ国民経済でした。ごく一部の人が大金持ちで大部分の国民がまずしい国民経済ではなく、貧富の差があまりなくて貧困層が底上げされているような国民経済です。具体的には、

農業重視、地方重視の国民経済であります。これこそが本物の近代国家、本物の強国だと彼は考えました。

ここで注意していただきたいのは、農業重視と農民重視とはかならずしも一致はしないという点であります。たとえば、農業政策の一番の目的は「食糧を確保すること」であるという立場があります。工業化にともなうコメ不足を解消するためには米の生産量を増やさなければいけないという観点で農業政策を考える人たちです。柳田国男はそれとは異なっています。柳田国男は農民の生活を向上させなければいけないという立場です。農民の生活の向上というのは、もちろん経済的な意味での向上であります。レジュームには農業重視と書いてありますが、柳田のばあい、実質は農民重視であります。

農業重視、地方重視の国民経済は、どのようにしてつくることができるのでしょうか。柳田国男は、「地元のヒト・モノ・カネ」で地域経済を作っていくべきだと主張して、地域自立型の経済構造を構想しました。これが彼の地域経済政策のポイントであります。なぜ地元のヒト、モノ、カネで地域経済を作らなければいけないのか、なぜこのような地域経済の上に国民経済を作らなければならないのかという問題は、後でまとめてお話しします。

やや図式的に表現しますと、政府が推進しております近代化の方向、工業化の方向は、柳田構想とはまったく正反対で、両者は対極的な位置関係にありました。それは一極集中的な内部構造をもつ国民経済であります。地域としては東京や大阪などの大都市が中心です。そしてヒトとカネを全国から集めます。モノも全国・世界から集めてきます。

ヒトを全国から集めるというのは、農家の次男、三男を全国の農村から集めて大都市の工場や商店で働かせるという意味です。農家の次三男は村にいても仕事がなく、たとえ安い給料であっても働き口があるだけ都会は魅力的だったのです。

カネを全国から集める、というのは注釈が必要になります。銀行はわたしたちから集めたカネをどうやって有効に使っているかということ、銀行の経営上の判断によりますが、かなりの部分は地元の会社に融資したりしますけれども、それ以外では別の銀行にカネを貸したりするなど、銀行どうしでカネの貸し借りをしております。ですから、地方の住民は、自分では地元の銀行に預金したつもりでも、そのカネは東京へ渡って一流大企業の事業展開に使われるということは普通にあります。銀行を介して地方のカネが大都市に集められるという構造は、明治時代から存在していました。そのことは、地域のカネが地域で有効に活用されていないことを意味します。

大都市では、モノも全国・世界から集ってきていました。主要な貿易港は神戸（大阪）と横浜（東京）でありましたが、輸出品・輸入品を大都市に集散させる必要から、鉄道網は大都市を起点にして放射線状につくられました。その結果、全国のモノが大都市にあつまることになります。一極集中の経済構造、これが政府の進めておりました近代化の基本的な構造でありました。

柳田国男はこれではいけないという批判を持っていました。彼の学生時代は、日清戦争、日露戦争の頃にあたっています。日清戦争は 1894 - 5 年、日露戦争は 1904 - 5 年でありました。清

国もロシア帝国も、日本にとりましては超大国でありました。世界地図を広げただけでも一目瞭然であります。しかし国土は広くとも、日本ほどには経済改革・社会改革に熱心ではありませんでした。そして二つの超大国に日本が勝ったということは、当時の日本人からみれば、これまでの一連の改革が正しかったことの証明ともなったのです。

同時に日清・日露の戦間期は、日本の産業革命期でもあります。とくに綿工業は有名ですが、蒸気機関をはじめとする欧米の技術体系を備えた工場が、このころに産業として日本で確立いたします。産業として確立できたのは国際競争力をもっていたからで、綿工業はほどなくして輸出産業へと発展しています。それだけに、綿工業を担った企業は大企業でありました。この産業革命期に、大企業主導の工業化路線が定着をいたします。こうした大企業は、政府の強力な指導のもとにありました。こうして日本の工業化は、一極集中型の経済構造のもとに、大企業主導型、国家主導型の工業化路線を歩んでいきます。

他方で、そのような工業化路線に批判的な考え方をする人たちも現れてまいります。それはどちらかといえば、地方の農民たちでありました。日清、日露の戦間期、つまり産業革命のころになると、地方の豊かな人たちには、明と暗がはっきりと分かれてまいります。産業革命は、日本の産業構造に大きな変革をもたらしました。地方の富裕農民のかなりの人たちは、この時期までに没落しました。そして残りの富裕農民は、それ以降は寄生地主になっていくという方向をたどります。没落した元富裕農民が、政府型の工業化路線への批判者となっていきました。

地方経済は、産業革命のころから徐々に性格を変えてまいります。とくに工業生産の部分では、地方はどちらかといえば比重が小さくなっていきます。大都市が生産の中心地になっていくからです。その結果、地方の生産は農業が中心となり、その生産はもっぱら小作農に担われていくこととなります。大都市＝工業、農村＝農業という地域間分業が形成されます。小作農は生産の担い手となって一生懸命働くのですけれども、小作料の負担が大きいといった理由などのために、経済的な余裕は少しもないという状態に置かれます。一部の知識人は、そのことに非常に強い危機感をもつようになりました。

この時代はナショナリズムの時代であったと先ほど申しあげました。このナショナリズムは大きく分けて二つに分けることができ、柳田国男は国民主義的ナショナリズムの側に組していることも、ご紹介しております。つまり農民の生活水準が重要であり、それは国家が保障しなければならないと考える立場に立っております。では、農民の生活を良くするためには何が必要になるのでしょうか。いうまでもなく、地域の経済を自立的にしていけることです。そのことを実現する政策が必要だと彼は考えます。

では、どのような政策を実施すれば地域自立的な経済構造を構築することができるのでしょうか。いまから彼の地域経済政策論の中身について、簡単にご紹介いたします。

日清戦争、日露戦争のころは明治の後半ですが、この頃から地域経済は相対的に衰退するようになっていきます。相対的衰退というのは、東京や大阪といった大都市の経済発展に比べて、地方の

発展速度が遅いという意味で相対的に衰退しているということでもあります。人口そのものは地方でも増えております。ただ東京や大阪のようなスピードでは増えないことが問題なのであります。

柳田国男の説によれば、地域経済の発展スピードが遅い理由は、鉄道網の作り方と関係していました。新幹線の鉄道網の作り方を見ればよく分かりますが、新幹線は東京を起点として各地へ広がって行くという放射線状の構造をもってあります。ですから‘地方’の人間が‘地方’へ行くのはかえって不便になることがしばしばあります。たとえば私は新潟にありますが、新潟から大阪へ行こうとすると、在来線で新潟から大阪へ直行するよりも、新幹線をつかって東京経由で行ったほうが早いという状況が生じたりもするのです。

なぜそのような放射線状の鉄道網が形成されるのかというと、さきほど申しあげたとおりで、外国貿易の必要性に負うところが大きであると彼は考えました。その結果、個々の地域経済はストレートに外国市場と結びつくという現象が生じます。たぶんこの高崎もその代表的な都市の一つだと思います。外国貿易が発展すれば地方都市も発展する、外国貿易がいろんな事情で難しくなると、その都市も厳しくなっていくという構造が鉄道の建設によって作られていくと彼は考えました。

ですから、地域のなかでの経済循環、ヒト・モノ・カネを地域の中で動かしていくことによって地域が発展していくという構造は、明治に入ってから潰されていくと彼は整理しております。どういふことかという、外国貿易が始まる前の日本経済は、彼の理解では、藩という単位で経済が一応は完結していました。今日の研究水準からみれば必ずしもそうは言えないのですが、彼の理解では、藩の中でヒト・モノ・カネが循環し、藩経済は自立していたと認識していました。地域自立的な経済構造は、江戸時代の中で育てられてきたと彼は考えております。

つまり、江戸時代の中で育てられてきた地域経済は、外国貿易をするようになったことによって、地域自立的な構造を崩されていったのです。では、どのような対策をたてればよいのでしょうか。

もちろん外国貿易を無視して日本経済の将来をつくることは不可能であります。日本経済を発展させるためには、外国貿易を盛んにしなければいけないということは彼も認めております。

柳田の提案する地域経済活性化策は、生産要素である土地、労働力、資本を再分配することでありました。土地は農地の再分配で、農家1戸あたりの農地面積をいまの2倍くらいに拡大するべきだという案でした。労働力は、農村の過剰な労働力を解消するために都市に移動するか、農村にとどまって商工業といった非農業に従事するべきだという内容になっています。資本についていえば、農村の資本はわずかなので、農村内部での資本形成を強化すべきだと考えました。要するに、広い農地を、少ない農民の数で耕作し、肥料や農機具等を多く用いて農業できるようになればよいという政策案です。そのような農業であれば、農民一人あたりの収入は多くなります。営農意欲は高くなり、生産量も増加することでありましょう。

地域経済を活性化するには、その生産物は、大都市ではなく、できるだけ地元で消費する必要があります。それには、近隣の交通網をもっと活用するべきでした。県道のような、鉄道以外の道路を使ってお互いに売り買いすればよいという提案であります。そこで売買する品物は、地元の工業

あるいは農家が副業で生産したものであります。地元の農家が生産した農産物を原料にして工業製品をつくり、それをお互いに販売しあえば大都市で生産されたものを購入する必要はなくなり、地域経済の自立性は回復できるのではないかというアイデアであります。そうすれば地域住民の収入ももっと増えるはずだということです。だから地元の農村工業で生産された商品は、もちろん外国で売られても構わないですけれども、原則としては地域内で消費されるべきであるという考えであります。つまり、ひとつの地域内に農工商の各産業が一セット揃っているのです。

農業については、‘企業としての農業’というものを彼は提案しております。農業経営もまた資本主義的な経営に転換するべきだという構想で、同時代の農業が非企業的に経営されているという現実を改善するためのアイデアであります。

彼が提案する‘企業としての農業’は、農業基本法で提唱されていた自立経営に相当する内容をもっています。自立経営というのは、農業収入だけで経営として自立できる農業をさします。日本の農業は兼業農家が多くを占めてきました。現代はもちろんのこと、明治時代にも多くの農家は兼業農家でありました。小作農は農業収入が少なかったので、日雇い仕事や行商などのアルバイトで現金収入を入手したのです。長塚節の作品『土』（1910）の主人公である「勤次」も、そうした農民の一人でした。

しかしアルバイト収入が不可欠であるならば、農民は農業に専念できません。農民というからには、農民が農業だけで生活できなくてはいかんのだというのが‘企業としての農業’です。柳田にとって、農業もまた、工業や商業と同じように、資本主義的な経営を可能とするのでなければならぬのでした。

農業だけで十分な収入が得られるようにするには、農地面積がもっと広くなければいけません。農地面積が狭いから収穫量が少なく、収入が少ない、だからアルバイトする、という悪循環を断ち切るためには、農地面積を大幅に拡大する必要があります。このことは、土地の再分配のところでご紹介しました。

自立経営を作るためには、農地を買い集めなければなりません。どうやってこのカネを作るのでしょうか。現代であれば政府の補助金をアテにしますけれども、柳田国男は補助金が大嫌いでありました。カネが必要であれば自分で作るべきだという立場でして、協同組合に大きな期待をかけます。当時は産業組合といいました。日本の協同組合はいまは非常に盛んで、生協はじめ、農協、漁協などが日本全国いたるところに作られています。法制度としてはじまったのは、明治の産業組合が最初です。

前にお話したとおり、彼が農商務省に勤務したのは1900（明治33）年でした。同じ1900年に産業組合法という法律が作られます。彼は農政課の役人として、産業組合法の意義や内容を関係者に広報してまわる仕事を与えられます。ですから柳田国男という人は、協同組合を担当した中央官庁の初代の役人でありました。『最新産業組合通解』（1902年）という本も書いていて、日本の協同組合の歴史に大きな足跡を残しました。

彼はこの法律に非常に強い思い入れを持ちました。産業組合は農民の経済水準を向上させるうえで非常に効果的であると期待したのです。産業組合には、購買組合、販売組合、信用組合、生産組合の4種があります。購買組合によって肥料などを安く買い、販売組合によって農産物を高く販売すれば、農民の手元には以前よりも多くの利益が残ります。その利益を信用組合に預けて協同貯蓄しておき、組合員である農民に必要なが生じたとき、たとえば農地を買い増ししたいと考えたときに、信用組合から融資を受ければよいと期待したのです。

柳田は思想家だけあって、理想主義的な傾向のつよい人でありました。理想と現実のあいだにギャップが存在するのは珍しいことではありませんが、彼は、現実が理想に近づくべきであると考えていました。

彼がもつた産業組合の理想は、村の一番貧しい人たち、つまり小作農民が産業組合に参加することでした。産業組合は組合員に大きな利益をもたらしますので、貧しい農民にこそ大きな恩恵をもたらすはずだったのです。ところが現実に産業組合の組合員になっているのは、どちらかといえば裕福な人たちでした。貧しい農民たちは産業組合には加入しませんでした。

なぜ参加しないのかというと、貧しいからです。支払い能力が不十分であるために、それほど多くの額を購入することはありませんし、購入しても代金を支払う能力があるかどうか疑わしいからです。産業組合を支える財政基盤ははなはだ弱体でありますから、組合の経営にマイナスになるかもしれない人は歓迎できないのです。そのため、産業組合にはある程度の経済力のある人でないと組合員にはならなかったのです。

しかし柳田国男にとって、経営上の配慮を優先させた組合経営は、産業組合の趣旨から逸脱したものでありました。産業組合は貧しい農民が少しでも経済的に向上するためにつくるものであって、そういう貧しい農民を排除して裕福な農民だけが組合員になるのは本末転倒でした。彼は、裕福な農民だけが産業組合に結集するのを「集会的利己主義」とであると厳しく批判していました。利己主義というと普通は個人の利己主義を指すわけですが、裕福な人たちが裕福な人たちだけで集まって自分たちの暮らしを良くしていくことを考えるのを、「集会的利己主義」とであると否定的に評価したのです。

では、産業組合を彼の理想に近づけた形で運営するのに必要なのは何であるかということ、それは「協同相助」の精神でありました。「協同相助」というのは、彼の造語かも知れませんが、もちろん、協同主義と自助主義を合成したことばです。自助主義はどちらかといえば個人主義的なものでありますが、彼は、村人が力を合わせて自分たちの困難を打開する、という意味で協同相助ということばをつくったのだと思います。自分たちの問題は自分たちで解決する、いいかえれば、補助金といった外部の手助けをアテにしないことを意味しています。

産業組合を運営するには協同主義と自助主義の二つの側面が必要になるのですが、現実には、この生き方（倫理）を農民は見失っている、あるいは集会的利己主義だけであると彼は考えました。産業組合が組合本来の趣旨を生かす方向で活動しなければ、まずしい小作農はいつまでたっても困窮状態から脱出できません。集会的利己主義に汚染された日本人から、協同相助の生き方をもつ日

本人へ、何とかして日本人を創り変えていかなければならないという危機意識を非常に強く持つようになります。

協同組合には「協同相助」の生き方が不可欠であるということは、彼が大学で協同組合の勉強をしたときに学んだことだと思います。では、この生き方は協同組合の本場であるヨーロッパには存在するけれども、日本にはないものなのかというと、「そうではない」と彼は考えます。いまの日本には存在しないけれども、昔の日本には存在していたと彼は考えました。

たとえば講、頼母子講などはかつての日本でもずいぶん発達していて、庶民の身近な金融機関となっていました。村を開拓するにあたって、村を開拓したのは農民以外の誰でもありません。江戸時代になると藩などの行政機関が村の開発には力を入れるようになりますけれども、彼はその側面よりも、村人たちが自分たちの必要で村を開発したという側面を非常に強く強調いたします。樹木を切り倒し、根を抜き、水路をつくり、田圃を水平につくる、というのはたいへんな重労働であります。それをかつての日本人は、村人どうして力をあわせて開発していったのです。

ですから、日本の農民は、お互い自分たちで助け合うという生き方を持っていたのだ、と彼は考えました。ところが明治に入って、政府が補助金という名のカネで農民を誘導するのが普通になると、協同相助の生き方は微弱になっていきました。補助金を出してくれるのであれば政府に協力するが、そうでなければ実行しないという風潮が強まってきます。それだけに、昔の日本人、昔の農民がどのような生き方をしてきたのかという問題を再認識・再評価するべきではないかという危機意識のもとに、民俗学に入って行ったのだと考えております。

そろそろ今日のお話を締めくくらせていただきます。帝国主義の時代にあって、つまりヨーロッパの超大国がアジアを植民地にしているという時代にあって、日本が植民地にならないで発展するためにはどのような構造をもつ国民経済が必要であるかということを考えました。そうした観点で、地域主義的な構成を持つ国民経済の仕組みを構築していかなければならないと考えたのでした。零細な規模しかもたない日本農業の規模を拡大して、自立経営を創出していきます。そして、そこで生産される農産物を加工する工業を興し、地域内で販売するという政策構想です。

こういう地域主義的な政策案はいつの時代でも形を変えて現出します。ほんの数日前の新潟の地元新聞によりますと、いま新潟県の農業界では「地産地消」という取り組みをやっているようがあります。「地産地消」、聞きなれないことばですが、言いたいことは伝わってまいります。地元で生産した農産物を地元で消費するという運動です。新潟県でも中国産の野菜が大量に入っており、かなり打撃を受けています。そういう中で、地元の農家が生産した美味しい野菜やくだものを地元の人が食べようというのです。これなども、さきほど柳田が地域経済政策のところで述べておりましたように、地域で生産したものは地域で販売する、地域で消費する、という構想の現代版といってよいと思います。

駆け足でございますけれども、予定の時間を越えてしまいました。柳田国男の地域経済政策論というテーマでお話をさせていただきました。長い時間静かに聴いていただきまして大変ありがとうございました。私の話はこれで終わらせていただきます。

藤 井 隆 至

(講演レジュメ資料)

柳田国男の地域経済政策論

2001年6月29日

高崎経済大学

新潟大学 藤 井 隆 至

〔講演のテーマ〕

柳田国男の中の地域経済政策論

× 地域経済政策論の中の柳田国男

〔柳田国男という人〕

略歴と主要著作 別紙参照

〔先行研究にみられる評価の観点〕

1. 民俗学者として 福田アジオ（『民俗学者 柳田国男』御茶の水書房）
2. 教育の思想家として 関口敏美
3. 近代化の思想家として 川田稔、藤井隆至（『柳田国男 経世済民の学』名古屋大学出版会）

〔この報告での評価の観点〕

本報告は、「近代化の思想家としての柳田国男という観点から、彼の地域経済政策論を紹介する。

〔本報告の結論〕

日本の近代化の内部批判者、日本が歩むべきもう一つの近代化の可能性を提起した思想家
自立した地域経済によって構成される国民経済を構想

柳田の社会的地位 高級官僚だが非主流派

農商務省 法制局参事官 貴族員書記官長 あと退職

(× 経済官庁の政策官僚)

帝国主義の時代にあって、日本が列強に互して生き抜くためには、どのような方向性をもつ国民経済が必要なのか

近代化の基本方向 農業重視・地域重視——非主流派

地元のヒト（労働力）・モノ（資源）・カネ（資金）主導で地域経済をつくる

内発型

政府の推進する近代化——主流派

重化学工業化 大都市

ヒトとカネは全国から集める

モノは全国・世界から集める

〔柳田の思想の特徴 I ——経験・学問・思想〕

柳田国男の思想は学生時代に原型がつくられている

日清戦争（1894）から日露戦争（1904）のあいだ

日本の産業革命の時代

日本の産業化の方向性がこの時期にほぼ定まる

主流派の理解 二つの戦争の勝利は、日本の進めてきた産業化

重化学工業化）の方向が正しかったことの証明

国家主義的ナショナリズムが高揚）

他方で、他方を再評価するべきだという世論（国民主義的ナショナリズム）も高まった時期——

ただし非主流派

危機感

他方経済（豪農らが担い手）の相対的衰退

——極集中型の国民経済の形成

上意下達型の人間（国家の統合力が強まる）

国家主義的教育が定着

〔柳田の思想の特徴 II 〕

政治思想としては国民主義的ナショナリズム

経済思想としては地域経済の再生

誰がそれを担うのか 究極的には人間の問題に帰着

〔柳田国男の地域経済政策論〕

危機感

地域経済についての現状認識

地域経済の相対的衰退

鉄道網の形成 東京・大阪中心に放射線状に線路が敷かれる

外国貿易 各地と貿易港を結ぶ

地域経済は全国市場に呑み込まれる

藤 井 隆 至

例 価格 地域の価格が全国市場や国際市場の価格より高いと、その商品は消滅
反対に安いと全国 や外国 に出荷される
地域経済は自立性を喪失

対策

地域経済の活性化 = 地域経済の自立性を回復

地域住民 高収入へ

近隣の交通網の復活

地域での消費に応える生産

農家副業や農村工業を発展させ、近隣で販売する

農業 自立経営 企業としての農業経営 の育成

農業収入だけで農業経営が経営として自立できる

農地面積を拡大 農地の買い増し

中規模の農工商業で構成される地域経済

現実には小作農の増加 借金等が原因で農地を手放す

農家には、農地を買い増す資金力が必要

個別農家の単独の力では無理 農家と農家の協力が不可欠

協同組合をつくる 当時の用語法では産業組合

購買組合、販 売組合、生産組合、信用組合

購買組合によって市価よりも安価に購入

販売組合によってより高価で販売

生産組合によって生産コストの低減

信用組合によって対人信用による融資

産業組合法 年

柳田の農商務省勤務と同年、産業組合法の啓発普及活動に従事、この法律に大きな期待を寄せる

産業組合の理想と現実

理想 貧しい組合員 村の農民や小商人、職人たちが産業組合の活動によって経済的に向上する

小産業者 中産業者

現実 村の富裕層が組合員となる

貧農層は産業組合から排除

柳田の評価

村人の現実の生き方は「集会的利己主義」

産業組合を理想の形で運営するために必要な村人の生き方は

「協同相助」の倫理

協同主義の自助主義

「協同相助」の倫理は日本に存在するのか

昔の日本人は「協同相助」の倫理でお互いに助け合って生きてきたという確信

歴史貫通的（「日本に固有」）なもの、

しかし現在の日本人はその倫理を希薄化

僻地に住む日本人は昔の日本人の生き方を多く伝えている

ことば（民俗語彙）に注目

ことばは生活の思想を表現する

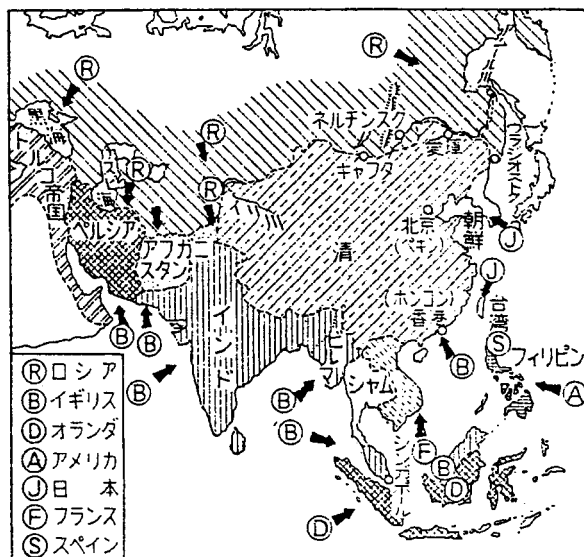
ことばの例：地名、伝説、昔話

「協同相助」の倫理の「自己認識」

日本人の再生 地域経済の再生

経済と倫理は車の両輪

民俗学に専念した時期も、おなじ地域経済政策論を堅持している



列強のアジア進出

藤井隆至

柳田国男略年譜

年	年齢	活動
年	明治	兵庫県神東郡辻川村 現在の神崎郡福崎町辻川 で生まれる。
年	明治	小学校入学。
年	明治	高等小学校卒業。
年	明治	茨城県北相馬郡布川町 現在の利根町布川 で医院開業の兄鼎のもとに身を寄せる。
年	明治	布川より上京して、兄井上通泰宅に住む。
年	明治	開成中学校編入学。
年	明治	第一高等中学校入学。
年	明治	『野辺のゆき』。東京帝国大学法科大学政治科に入学。
年	明治	東京帝国大学法科大学政治科を卒業。農商務省農務局に勤務。早稲田大学で「農政学」の講義を担当。
年	明治	柳田直平家の養子となる。
年	明治	「小作料米納の慣習を批判す」
年	明治	九州旅行をし、七月一三日推葉村訪問。十一月佐々木喜善柳田宅を訪問。
年	明治	遠野訪問。『後狩詞記』
年	明治	内閣書記官記録課長となる。『遠野物語』、『時代ト農政』
年	明治	「イタカ」及び「サンカ」
年	大正	高木敏雄と協力して雑誌『郷土研究』創刊。「巫女考」、「山人外伝資料」、「所謂特殊部落の種類」
年	大正	貴族院書記官長となる。
年	大正	郷土会による神奈川県内郷村調査に参加。
年	大正	貴族院書記官長辞任。
年	大正	朝日新聞社入社。十二月 翌年三月九州、沖縄へ旅行。
年	大正	国際連盟委任統治委員としてスイスへ赴任。
年	大正	国際連盟委任統治委員としてスイスへ再度赴く。『郷土誌論』
年	昭和	『蝸牛考』。朝日新聞社論説委員辞任。
年	昭和	『明治大正史世相篇』、『日本農民史』
年	昭和	民間伝承論の講義を開始 毎週木曜日自宅。『桃太郎の誕生』
年	昭和	山村調査開始 一九三六年まで。『民間伝承論』
年	昭和	日本民俗学講習会開催、民間伝承の会成立。『国史と民俗学』、『郷土生活の研究法』
年	昭和	海村調査開始 一九三九年まで。
年	昭和	『歳時習俗語彙』、『木綿以前の事』
年	昭和	『妹の力』
年	昭和	『日本の祭』
年	昭和	『国史と民俗学』
年	昭和	『先祖の話』、『家閑談』、『祭日考』
年	昭和	民俗学研究所設立。
年	昭和	『婚姻の話』
年	昭和	民間伝承の会を日本民俗学会と改称し、会長に就任。『北小浦民俗誌』
年	昭和	文化勲章受賞。監修『民俗学辞典』
年	昭和	「海上の道」
年	昭和	民俗学研究所解散。
年	昭和	『故郷七十年』
年	昭和	千葉市で「日本民俗学の頹廃を悲しむ」と題して講演。
年	昭和	『海上の道』
年	昭和	死去。